



## 研究用試薬

## ヒストファイン

## 第一抗体

## CD25ウサギモノクローナル抗体(EP218)

(動物種: ウサギ)

包装: 45テスト (1.8mL × 3本) Code: 418549

製造販売元

## 株式会社ニチレイバイオサイエンス

〒104-8402

東京都中央区築地 6-19-20

TEL. 03(3248)2208 FAX. 03(3248)2243

■特異性及び抗原分布: ヒトCD25(別名: Tac)抗原と特異的に反応する。CD25は分子量55kDaの膜貫通糖タンパク質で、インターロイキン-2レセプター(IL-2R)の $\alpha$ 鎖であり、単体ではIL-2に対して低親和性レセプターであるが、CD122(IL-2R $\beta$ )およびCD132(共通 $\gamma$ 鎖、 $\gamma c$ )と三量体を形成することで高親和性レセプターとなる<sup>(1)-(6)</sup>。この高親和性レセプター(三量体)がIL-2と結合することで、制御性T細胞(Treg)へのシグナル伝達による免疫寛容や、エフェクターT細胞(Teff)へのシグナル伝達による免疫活性化に関与する<sup>(9)-(10)</sup>。正常では、制御性T細胞、活性化T細胞、NK細胞、樹状細胞などの細胞膜に発現がみられる<sup>(3)-(7)</sup>。腫瘍では、成人T細胞白血病/リンパ腫(ATLL)、有毛細胞白血病、肥満細胞症、未分化大細胞型リンパ腫、ホジキンリンパ腫などに発現がみられる<sup>(2)(6)</sup>。骨髄生検標本におけるCD25の免疫組織化学染色は、非腫瘍性肥満細胞では発現がみられず、腫瘍性肥満細胞では発現がみられることから、全身性肥満細胞症の判別に用いられている<sup>(6)(8)</sup>。

注) CD25を発現している細胞は、細胞膜の他に細胞質にも弱～中程度の染色がみられることがある。

■クローン: EP218

■アイソタイプ: ウサギIgG

■免疫原: ヒトCD25タンパク質のアミノ酸配列に相当する合成ペプチド

■製法: アフィニティー精製して得ている。

## 1. 内容

第一抗体・・・CD25ウサギモノクローナル抗体(EP218) (動物種: ウサギ)。

液状。

ウシ血清アルブミン(BSA)と、0.1%アジ化ナトリウムを含むリン酸緩衝生理食塩水(PBS)中にて、即時使用可能な抗体濃度に希釈済み。

1バイアル中に1.8mLを含む。

## 2. 使用目的

組織・細胞中のヒトCD25抗原の染色。

ホルマリン固定パラフィン包埋切片の免疫染色に使用できる。

研究用としてのみ使用すること。

## 3. 使用方法

組織切片の場合、前処理(抗原賦活化)としてヒストファイン 抗原賦活化液pH9を用いた熱による抗原賦活化処理(温浴処理95～99℃、40分間)が必要である(裏面をご参照ください)。

スライド上の組織切片が完全に覆われるように第一抗体を2滴(100 $\mu$ L)滴下し、常温(15～25℃)で30分～1時間インキュベートする。

この反応時間は、ヒストファイン シンプルステインMAX-PO(R)を使用する場合の目安であり、他のキットを使用する場合は、研究者自身が至適反応時間を調べる必要がある。

※参考: 組織の固定条件などにより温浴処理の代わりにオートクレーブ処理(120℃、20分間)を行うことで、良好な染色結果が得られる場合がある。

※注意: 組織の固定状況などが染色結果に影響を及ぼすため学会などが推奨する固定液や固定時間を遵守し、検体の取扱いには十分注意すること。染色条件を変更することで良好な染色結果が得られる場合があるが、組織へのダメージや偽陽性化、偽陰性化が起こるおそれがあるため、研究者自身の責任において至適条件をよく検討すること。

## 4. 貯法及び使用上の注意

- 2～8℃で保存すること。
- 使用期限はラベルに記載されているので使用前に確認すること。
- 使用前に常温に戻すこと。
- 使用後は速やかに冷蔵保存すること。
- 異なるロットの試薬や他製品の試薬を混ぜたりしないこと。

## 5. 取扱い上(危険防止)の注意

- 使用期限の過ぎた試薬は使用しないこと。
- 本品に関する化学物質の安全情報は安全データシート(SDS)を参照すること。
- 本品を吸い込んだり、眼、口、皮膚、衣類などへの接触を避けること。
- 本品の廃棄の際には、各施設や地域および国のルールに従い、適切に廃棄すること。
- 本品は、動物由来成分を含むので、取扱いに注意すること。
- 本品にはアジ化ナトリウムが含まれている。アジ化ナトリウムは水道管に含まれる銅、鉛との反応によって爆発の危険性があるので、多量の水とともに洗い流すこと。
- ヒト由来の検体は、感染のおそれがあるので取扱いには十分注意し、医療廃棄物などに関する規定および水質汚濁防止法などの規制に従って処理するとともに、免疫染色を実施するにあたって関連技術および操作方法を十分習熟しておくこと。

## 6. 参考文献

- (1) Franke A, et al. Interleukin-2 receptor  $\alpha$  (IL-2R $\alpha$ /CD25) shedding is differentially regulated by N- and O-glycosylation. *Biochim Biophys Acta Mol Cell Res.* 2025 Jan;1872(1):119863.
- (2) Damoiseaux J. The IL-2 - IL-2 receptor pathway in health and disease: The role of the soluble IL-2 receptor. *Clin Immunol.* 2020 Sep;218:108515.
- (3) Lokau J, et al. The soluble IL-2 receptor  $\alpha$ /CD25 as a modulator of IL-2 function. *Immunology.* 2024 Mar;171(3):377-387.
- (4) Liao W, et al. Interleukin-2 at the crossroads of effector responses, tolerance, and immunotherapy. *Immunity.* 2013 Jan 24;38(1):13-25.
- (5) Shouse AN, et al. Interleukin-2 signaling in the regulation of T cell biology in autoimmunity and cancer. *Immunity.* 2024 Mar 12;57(3):414-428.
- (6) Dabbs DJ, editor. *Diagnostic Immunohistochemistry.* 5th ed. Philadelphia, PA: Elsevier; c2019. 932p.
- (7) Abel AM, et al. Natural Killer Cells: Development, Maturation, and Clinical Utilization. *Front Immunol.* 2018 Aug 13;9:1869.
- (8) Ustun C, et al. Systemic mastocytosis: current status and challenges in 2024. *Blood Adv.* 2025 May 13;9(9):2048-2062.

# 免疫染色における操作手順及び試薬の調製方法

## ■操作手順

[切片の準備]

1. 切片を3~6µmに薄切し、poly-L-lysineまたはシランなどの切片用接着剤をコーティングしたスライドに貼り付け、37℃の恒温器で十分に乾燥させる。

[脱パラフィン]

2. 脱パラフィン → 親水化 → PBS洗浄

[抗原賦活化処理(必要な場合)]

3. 前処理(抗原賦活化): 熱による抗原賦活化処理またはタンパク質分解酵素処理

[染色手順]

4. ブロッキング試薬(3%過酸化水素加メタノール)による処理 10~15分間/常温 → PBS洗浄

5. 第一抗体の添加・反応 30分~1時間/常温 → PBS洗浄

6. ヒストファイン シンプルステインMAX-POの添加・反応 30分間/常温 → PBS洗浄

7. 基質溶液(DAB)の添加・反応 5~20分間/常温 → 水洗

8. 対比染色 → 流水洗

9. 脱水 → 透徹 → 非水溶性封入剤で封入

留意事項

- ・抗原賦活化処理を必要としない場合は3.のプロセスを行わず、4.のプロセスに進む。
- ・4.のプロセスは3.の前に行ってもよい。
- ・ヒストファイン SABキットを使用する場合は上記1.~4.まで行いSABキットの操作方法に従って染色を行う。

<前処理(抗原賦活化)方法>

□熱による抗原賦活化

・温浴処理

- ①温浴槽をあらかじめ95~99℃に温めておく。以下の操作を行うにあたり、手袋などを用いて高温による火傷に注意する。
- ②調製した抗原賦活化液を耐熱性の染色バットに入れ、ゆるく蓋をする。これを温浴槽に入れ、95~99℃に温める。
- ③抗原賦活化液の温度が95~99℃に達したら、スライドを抗原賦活化液に浸漬させ、ゆるく蓋をする。
- ④抗原賦活化液の温度が再び95~99℃まで上昇したことを温度計で確認してから、40分間、95~99℃でインキュベートする。
- ⑤染色バットを温浴槽から取り出し、蓋をはずす。スライドを浸したまま常温(15~25℃)で20分間放置しゆっくり熱を冷ます。
- ⑥スライドを抗原賦活化液から取り出し、PBSで洗浄する。

・オートクレープ処理

- ①調製した抗原賦活化液を耐熱性の染色バットに入れ、スライドを浸漬させる。
- ②染色バットに蓋をする。蓋が取れないように輪ゴムでとめる。
- ③120℃、20分間オートクレープ処理する。
- ④圧力が十分下がった後、染色バットをオートクレープから取り出し、蓋をはずす。スライドを浸したまま常温(15~25℃)で20分間放置しゆっくり熱を冷ます。  
※オートクレープ処理後は、染色バットおよび抗原賦活化液などが高温になっている。これらを取り扱う際は、手袋などを使用して火傷に注意する。
- ⑤スライドを抗原賦活化液から取り出し、PBSで洗浄する。

・マイクロウェーブ(MW)処理

- ①調製した抗原賦活化液を耐熱性の染色バットに入れ、MW照射し沸騰させる。以下の操作を行うにあたり、手袋などを用いて高温による火傷に注意する。
- ②沸騰した抗原賦活化液に切片を浸し、MWを5分間照射する。必要であれば、MW照射をもう1~2回繰り返す。  
※MW照射による沸騰で抗原賦活化液は蒸発する。蒸発により抗原賦活化液が減少し切片の乾燥が危惧される場合は、ピーカーなどであらかじめ沸騰させておいた精製水を減少した分だけ加えてからMW照射を行うこと。  
※MW照射を1回(照射時間10~15分間程度)のみで行っても良い。
- ③染色バットごと切片を常温(15~25℃)に20分間以上放置し、ゆっくり熱を冷ます。
- ④スライドを抗原賦活化液から取り出し、PBSで洗浄する。

抗原賦活化液pH9の調製方法

ヒストファイン 抗原賦活化液pH9(Code: 415201)は即時使用可能な溶液に調製済。そのまま用いる。  
ヒストファイン 抗原賦活化液pH9(Code: 415211)は10倍濃縮の抗原賦活化液pH9である。必要量をはかり精製水で10倍に希釈する。

10mM クエン酸ナトリウム緩衝液(pH6.0)の調製方法

A液 9mL+B液 41mL+精製水 450mL(用時調製)

A液: 0.1M クエン酸水溶液  
クエン酸一水和物 (C<sub>6</sub>H<sub>8</sub>O<sub>7</sub> · H<sub>2</sub>O) 2.1g/精製水 100mL  
B液: 0.1M クエン酸ナトリウム水溶液  
クエン酸三ナトリウム二水和物 (C<sub>6</sub>H<sub>5</sub>O<sub>7</sub>Na<sub>3</sub> · 2H<sub>2</sub>O) 14.7g/精製水 500mL  
ここから必要な時に調製する。

□タンパク質分解酵素処理

・プロテアーゼによる抗原賦活化

- ①組織切片にヒストファイン プロテアーゼ溶液1~2滴を滴下し、25℃で5~15分間インキュベートする。  
※第一抗体の種類や組織の固定条件などにより、37℃で5~15分間インキュベートすると良好な染色が得られる場合がある。
- ②PBSで洗浄する。

プロテアーゼ溶液の調製方法

ヒストファイン プロテアーゼ溶液(Code: 415231)は即時使用可能な溶液に調製済。そのまま用いる。

・トリプシンによる抗原賦活化

- ①組織切片に調製したトリプシン溶液1~2滴を滴下し、37℃で10分間インキュベートする。
- ②PBSで洗浄する。

トリプシン溶液の調製方法

ヒストファイン トリプシン溶液(Code: 415101)はトリプシン濃縮液(試薬A)と希釈液(試薬B)から構成される。  
トリプシン濃縮液(試薬A) : 希釈液(試薬B)を1 : 3となるように調製し、十分に混和する。

## ■試薬の調製方法

- ・ブロッキング試薬(3%過酸化水素加メタノール)の調製方法  
30%過酸化水素水をメタノールで10倍希釈する。

※その他必要な試薬の調製方法に関しては、各製品の電子化された添付文書や製品に同梱されている使用説明書をご確認ください。